巻 頭 言

ライフデザイン学研究 18
p.3（2022）

『ライフデザイン学研究』第18号に寄せて

ライフデザイン学部長　水 村 容 子

2005年に設立されたライフデザイン学部は、2022年度末をもって発展的に新たな２学部へと再編されます。したがって、学部紀要『ライフデザイン学研究』は本号をもって最終巻となります。

ライフデザイン学部が活動した17年間は、様々な社会課題・困難がはっきりと出現した時間であったように思います。特に社会へ大きな影響を及ぼした出来事は、2011年東日本大震災、2020年からのコロナ禍、2022年からのウクライナ紛争ではないでしょうか。高度経済成長期に育ち、大学時代に日本社会のバブルを経験した私には、社会は安定し成長するもの、そして努力は必ず報われるものという価値観が身についています。しかしながら、実際の日本社会はその様なメンタリティーで乗り切れることのできない困難、すなわち人口減少・少子高齢化という現象に直面する中で、追い討ちをかけるように上記の３つの出来事に遭遇してきました。その結果、我々の社会の脆弱性や不確実性が詳らかになったと私自身は捉えています。こうした時代に「ライフデザイン」を学問として確立することには大きな意味があります。ここで、過去形を用いるのは、役割が終わったという意味ではありません。

現在、様々な課題に対する社会全体のアプローチは、既成の制度や概念にしがみつく一方で、新たな価値観・イノベーションを求める動きが生じている、と捉えられるのではないでしょうか。このような世情において、研究あるいは研究者の役割とは、因習に囚われず、それと同時に一時の価値観に流されず、人々の生活に真に必要な知見を導き提案していくことであると考えます。新しい学部では、こうした社会要請に応えられる研究・教育がより一層充実していくことを期待しています。

教員の皆様の新学部での更なるご活躍を祈念し、ここに『ライフデザイン学研究』最終号の巻頭言を記します。